

コーパスによる程度副詞イタクの使用実態の一考察 ―通時的变化を注目して― 華迪聖

本発表では、『日本語歴史コーパス』及び『現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）中納言』に基づき、程度副詞イタクの使用実態を通時的分析し、年月が経つにつれてその意味・用法の盛衰と変遷を報告する。上代語から現代語にかけて程度副詞イタクが用いられた例文を抽出し悉皆調査を行い、各時代における例文の用例数、共起語（修飾する動詞・形容詞または他の表現と呼応して用いられる定まった表現）、イタクの表記を整理した上で使用実態を考察した。その結果は以下の通りである。

程度副詞イタクの初出は調査の限りでは奈良時代の『古事記』である。

上代語から中世語まで『日本語歴史コーパス』に収録された全ての資料には程度副詞イタクの該当例が確認されるが、時代が下り、文語体から口語体へと文学の主流が変化する中で、近世語以降はイタクの出現率が大幅に低下する。また、イタクと共起する語彙は時代によって相違が見られる。各時代の共起語彙の上位群を確認すると、上代語から中世語までは自然現象に関わる「(風が) 吹く」「(雨が) 降る」「(夜が) 更ける」などの語彙が目立つが、その以降は激減する傾向にあり、現代語においてはそれらの表現は完全に消滅した。その代わりに、「気に入る」「傷つける」「感動する」「感激する」などのような感情に関連する表現と共起することが多い。さらに、上代語から中世語までイタクとの共起性が強い文法的表現は禁止を表す「な…そ」とイタクに上接する「いと」が確認される。尚、上代語から現代語にかけてイタクの表記の変化に関しては、上代語のイタクの表記は「痛」「甚」「疾」「多」「太」があり、「伊多久」という音写も見られる。その以降は日本語の音声的变化や文学背景の変化によってイタクの表記法も変わりつつあるが、現代語では主に「いたく」、または「痛く」のように表記が安定している。